大阪市立大学大学院　都市系専攻
修士論文概要集 2019 年 2 月

公共空間におけるアクティビティの通年変化に関する研究
ー「グランフロント大阪北館西側歩道空間における座具設置社会実験」を対象としてー

A STUDY ON THE YEARLY CHANGE OF ACTIVITY IN PUBLIC SPACE -IN CASE OF SEATS SETTING SOCIAL EXPERIMENT IN WESTERN SIDEWALK OF NORTH BUILDING OF GRAND FRONT OSAKA -

都市計画分野　遠矢　晃穂
Urban Planning　Akiho TOYA

公共空間の賑わいに資する社会実験が拡大する中、そこでのアクティビティに着目して検証することが求められる。本研究では、グランフロント大阪北館西側歩道空間を対象に、座具の通年設置による季節変化に加え、発生頻度の少ないアクティビティに着目し、活動タイプ分けや 1 日の空間変化を追うことでイベントによる効果検証を行った。その結果、季節ごとや平日/休日の違いが明らかとなり、リピーターの出現とイベントによる効果が確認された。

Social experiments for the revitalization of the public space is an important issue today. This study focus on the activity caused by the street furniture of social experiments in western sidewalk of north building of Grand Front Osaka. This study first verify the yearly change as well as effect caused by events of activity. Second, I analyze the type division of each activity and change of atmosphere of space chasing that user of street furniture. As a result, this study make clear the difference between every season and weekday / holiday and clarify the appearance of repeaters and the effect of the events.

１．はじめに

１−１　研究背景と問題意識

近年の公共空間の賑わいに資する社会実験[1)]は、利用者数や交通量の増加、周辺の売り上げ等、多くの側面から評価することができる。一方、社会実験によるアクティビティへの影響から、空間利用のポテンシャルや特徴を捉えることによっての効果を検証し、知見を得ることも必要であると考えられる。そこで、一定の発生頻度に満たないアクティビティにも着目することで、アクティビティの発生による効果を検証し、空間の質に対する知見を得、魅力的な公共空間として保ち続けるための、詳細な利活用方法を検証することが必要であると考えられる。

１−２　研究目的

公共空間における社会実験調査の通年変化(季節的な空間利用の変化とイベント時)による効果を、基本的な定量評価[注1)]に加え、発生頻度の低いアクティビティに着目し、空間内の時間的な使われ方の変化を踏まえた知見を得ることを目的とする。

１−３　研究の位置づけ

公共空間とアクティビティを扱う研究は、①公共空間における管理・運用に関するもの[2)]②公共空間のマネジメントに関するもの[3)4)]③アクティビティと行動誘発要素（イス、ベンチ等）の関係を解く研究[5)]、④公共空間のアクティビティの評価手法に関するもの[6)]⑤仮設環境によるアクティビティの生育に関するもの[7)]がある。

本研究では、社会実験によるアクティビティの季節的な変化を踏まえて分析し、計画者が土台づくりを行い、使う人たちが連鎖的に多様なアクティビティを起こし、自ら空間を生み出していくことを考察する点において新規性がある。

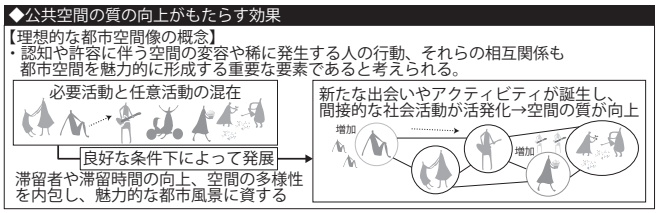


図１　研究の概念図

１−４　用語の定義

【アクティビティ】人が起こす種々の動作のこと。

【賑わい】ある空間において、不特定多数の人々の多様なアクティビティが内包されている状態。

【公共空間】本研究では不特定多数の人が利用できる公共的なスペースのことを指す。

1－5　研究の方法と流れ

本研究の流れを図 2 に示す。2 章では本研究の社会実験の全体像と概要を整理する。3 章では、対象空間での通年的変化の実態を明らかにし、それを踏まえて 4 章ではアクティビティを活動タイプ毎に分け、発生回数による占有割合からイベント前後の変化を明らかにした上で、時間帯ごとに考察を行う。5 章では、1 日のアクティビティ変化から通年変化の実態を明らかにした。

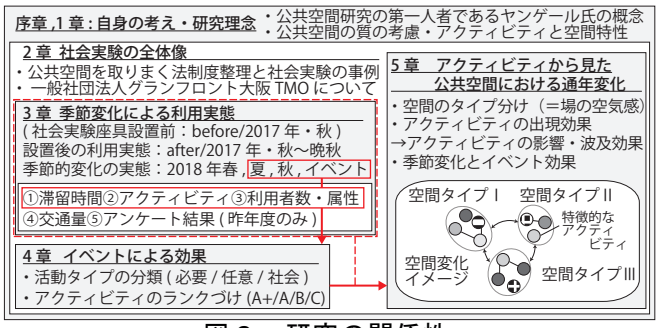


図２　研究の関係性

2．社会実験の背景と全体像

研究の対象地と調査の概要

本研究では、大阪・梅田の道路占用許可[注2)]認定を受けたグランフロント大阪（以下 GFO とする。）北館西側歩道空間を対象とする。当該地は人通りが少なく殺風景であった上、以前から GFO 内従業員の休憩場所が少ないことが指摘されていた。その為、パラソル等[注3)]を設置し、社会実験検証を行った。

社会実験座具設置期間：2017 年 10 月 1 日～現在		
調査日時	【平日】各日 8:00～20:00 の 12 時間	【休日】各日 8:00～20:00 の 12 時間
設置前	2017 年 9 月 25 日	9 月 24 日
設置直後	2017 年 10 月 24 日、11 月 16 日	2017 年 11 月 3 日、11 月 19 日
季節変化	春：2018 年 5 月 15 日 , 夏：7 月 12 日 秋：10 月 19 日 , イベント：10 月 16 日	春：2018 年 4 月 22 日 , 夏：7 月 14 日 秋：10 月 20 日 , イベント：10 月 13 日
調査員	【休日】AM/3 人、PM/3 人【平日】AM/2 人、PM/2 人、11:00～17:00 間 /1 人	
調査項目	①時間断面ごとのアクティビティおよび滞留時間調査　②5 分断面調査 ③交通量調査　④イベントの企画（イベント調査）　※⑤来訪者アンケート調査 ※⑥テナントアンケート調査　※⑦ソシオアンケート調査　※研究対象外	

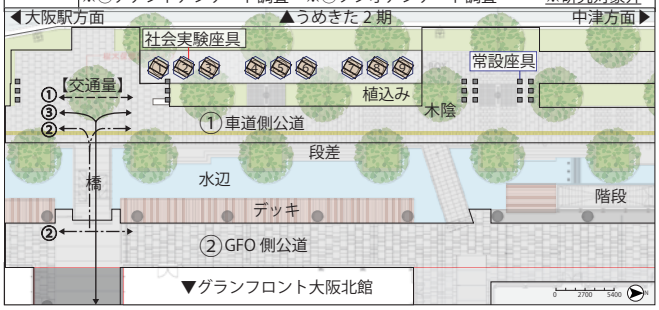
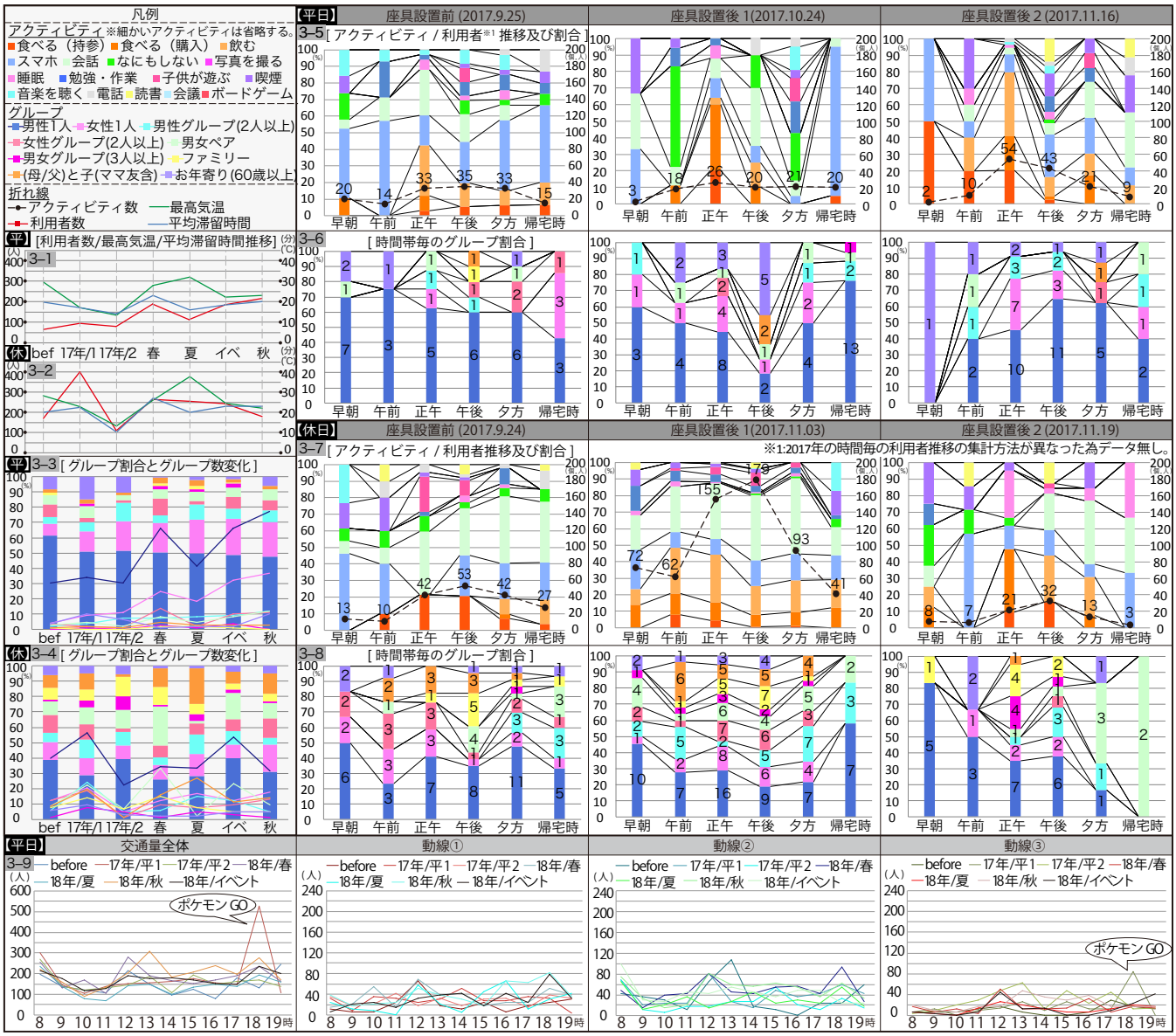


図３　調査の概要及び調査対象地図

表１　通年変化の結果（2017, 2018 年）



３．季節毎の変化と実態

３−１　利用者/滞留時間/アクティビティ

社会実験座具設置直後よりも、徐々に利用者数、アクティビティ数ともに増加していることがわかった。(3−1、3−2、3−5、3−7)例外的に、2017 年 11/3 は学会があったことによるサラリーマン層が平日並みに居たこと、2018 年の夏はパラソルの減少による影響(4 章参照)と猛暑日であったことによる影響から夏の利用者数、平均滞留時間ともに低下したことがわかった。利用者、アクティビティ数ともに、平日では正午、休日では午後の時間帯に最も多くなり、両者のピークに違いが見られ、定着傾向も見られた。(3−5〜3−8) また、「飲食」のアクティビティにも両者に違いが見られる。平日はピークが分かりやすいが、休日は慢性的に生じている傾向がある。通年を通し、「飲食」アクティビティが主目的であることに季節的な変化は無いことが言えるが、休日は「会話」や「子供の遊び」のアクティビティの割合が高くなる傾向も見られた。また、季節を追うごとにアクティビティも多様化していることから、賑わいに資する結果が得られた。

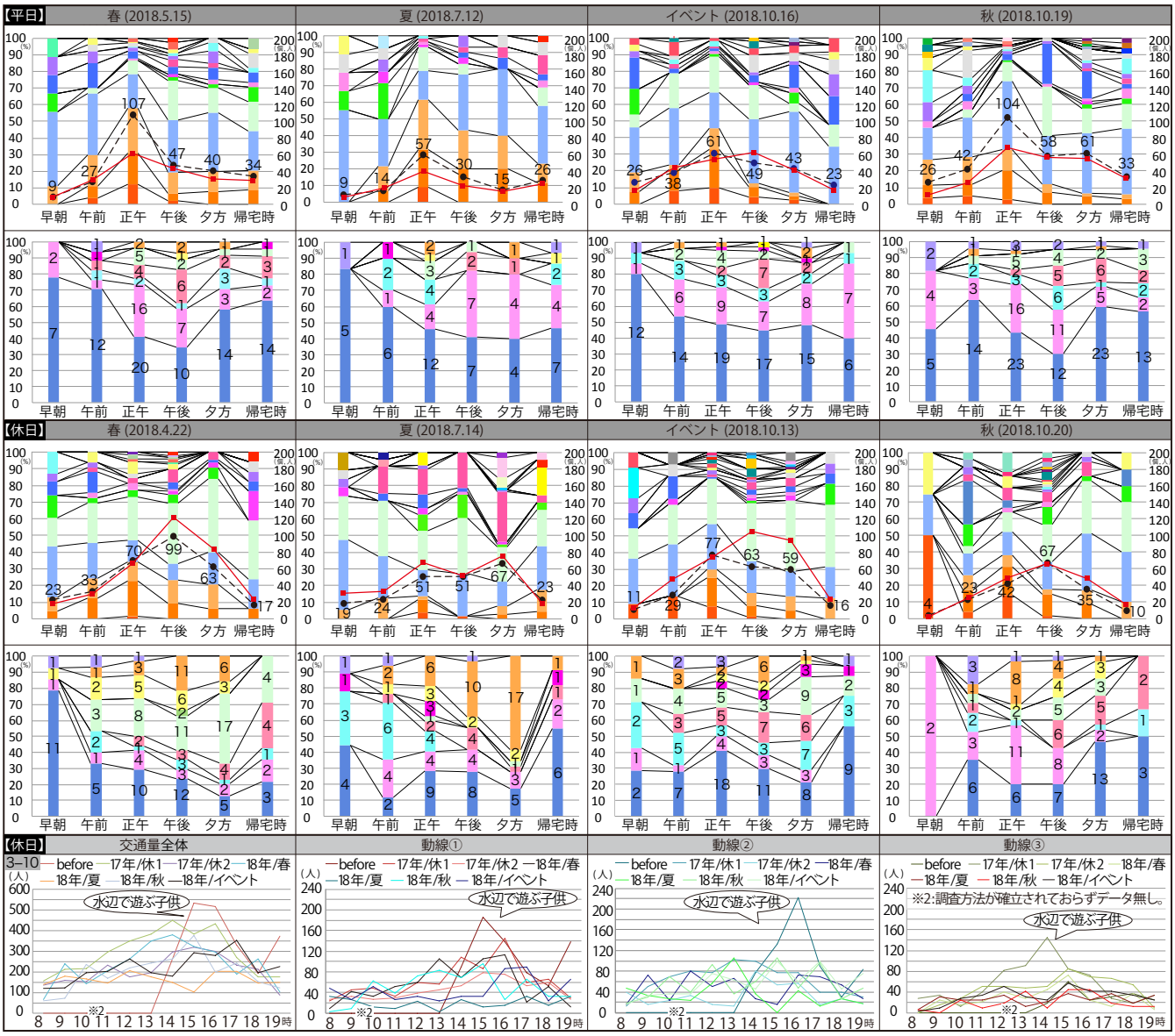
３−２　利用者属性

利用者の増加に伴い、団体利用も増加していることから、当該地の認知の広がりが考えられる。平日は男性 1 人の利用者数が半数を占めており、GFO 従業員の利用が考えられる。(3−3、3−4)また、昨年より今年は女性の利用者が増加しており、時に昼以降に増加する傾向が見られる。(3−6、3−8)一方で休日は、団体利用の割合が多くなっている。以上のことから、平日と休日の使われ方に違いがあることが言える。夏の利用者数は少なかったが、ファミリー層や母/父と子のグループが多く、アクティビティの結果も踏まえて当該地周辺の遊び利用が考えられる。

３−３　交通量

通年的な変化はほとんど見られなかったことから、座具設置による交通に与える影響は軽微と言える。全ての動線について、平日は 12 時台、休日は 14〜15 時台に一時的に増加していることから、利用者数の増加とリンクしていることが分かった。また、どの季節も平日より休日の交通量が多く、休日での当該地利用が比較的に多いと思われる。(3−9、3−10)

表２　通年変化の結果（2018 年）



４．イベントによるアクティビティの出現効果

４−１　イベントの概要

一定の認知が広まった 2018 年の夏調査以降、対象地内に一部の設定変更と共にイベントを開催し、考察を得た。内容は、設定変更：座具の減少(パラソルの数を 9 セットから 6 セットに変更)と、イベント：モノとコトの挿入[注4)] (①1 人用の移動可能な屋外用椅子を 6 脚設置、②ボードゲーム、③シャボン玉等の設置、④ミニ黒板 3 テーブルに 1 セット設置⑤学生のサクラ)とした。ただし設定変更は、通年設置している中で生じた不慮の事故であった為、本研究ではこの影響については追加考察として加えた。

４−２　分析視点：発生頻度の低いアクティビティ

アクティビティは、通年設置の中で多く見られるものから滅多に表れないものまで多種多様である。その実態を把握し周囲への影響を捉えた。分析の流れを図 4 に示す。抽出の結果、「飲食」「スマホ」「会話」のアクティビティは対象外とし、分析を行った。

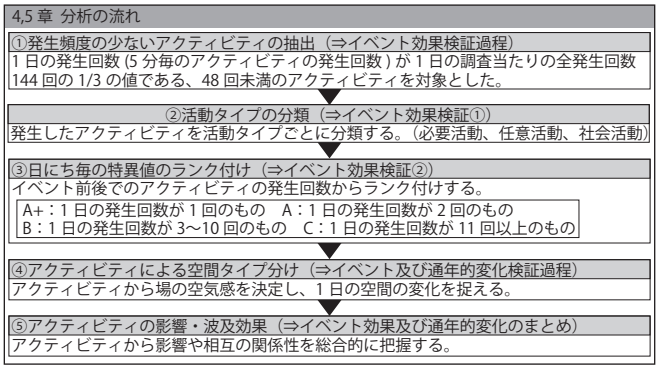


図４　分析の流れと概要

４−３　アクティビティの活動タイプとランク付け

まずアクティビティを必要活動、任意活動、社会活動の 3 タイプ[注5)] に分類した。必要活動とは、通勤や買物など義務的で必要に迫られて行う活動である (例/アルバイト、通勤通学、待ち合わせ) 。任意活動とは、散歩や日光浴など、屋外の物的条件に大きく左右され、条件が最適な時に自然と発生する活動である (例/佇む、回遊、ボーッとする) 。社会活動とは、あいさつと会話や子供たちの遊ぶ様子や他の人をただ眺め、耳を傾けるという受身のふれあいを含んだ必要活動や任意活動が発展した活動である (例：遊び、挨拶、会話) 。これらの活動タイプの発生結果を図 5 に示す。また、アクティビティを 1 日の発生回数毎にランク付けし、ランク毎の占める割合を算出した。これらの結果、イベント時は①社会活動が多く発生したこと、②ランクが高い（発生回数が少ないアクティビティ）の出現回数が多かったこと、③ランクごとの発生分布が最も均等に近かったことから、ある一定のアクティビティのみで長期間占領されている空間ではなく、多様なタイプのアクティビティが混在した賑わいに資する空間であることが明らかになり、イベントによる効果が示唆された。また、設定変更による効果として、活動自体がほとんど発生しなかったことや、秋調査時と傾向はほとんど変わらないことが分かった。その他に、全体的に休日の方が社会活動の発生する割合が高いことも確認された。

５．アクティビティによる公共空間における通年変化

５−１　アクティビティから見た空間のタイプ分け

発生したアクティビティから空間のタイプ分け (図 6)を行い、1 日の変容を追った。また、ここでの空間とは、建築的なものではなく、マネジメントや簡易的な変化、場の雰囲気のことを指す。

空間タイプ	アクティビティ条件	方法
①静寂空間	睡眠・音楽を聴く・読書・何もしない・眺める行為の割合が全体の 2/3 以上	割合によるタイプ分け
②安らぎ空間	①＋喫煙・電話の割合が全体の 2/3 以上	
③必要活動多発空間	必要活動・読書の割合が全体の 2/3 以上	
④賑わい空間	任意活動・社会活動の割合が全体の 2/3 以上	
⑤勉強空間	①＋勉強・作業の割合が全体の 2/3 以上	
⑥遊びの空間	子供が遊ぶ・子供の世話・写真撮影・遊び関連のアクティビティ が 1 時間以上発生したつ場合	
❶出勤空間	喫煙・読書・スウィング・ストレッチなど	傾向によるタイプ分け
❷食後空間	歯磨き・睡眠・作業・音楽を聴くなど	
❸アクティビティ多様空間	活動タイプに関係なく、アクティビティが分散している状態	

図６　空間タイプの分類方法

５−２　アクティビティの出現効果（図７）

イベントによる効果を詳細に把握するために、アクティビティの発生による空間変化や、影響・波及効果の実態から、最終的には通年の座具設置によるアクティビティの定着と出現効果を模式化した。(図 7)その結果、カップルのボードゲーム利用や、その光景を見ているサラリーマンの様子、サクラのシャボン玉利用による影響が確認されたことから、イベントによる効果が認められた。また、どの調査日においても「子供の遊び」による社会活動の活発化が著しい結果や、早朝時の体を動かすアクティビティが多くなる傾向、リピーターの発生も確認された。

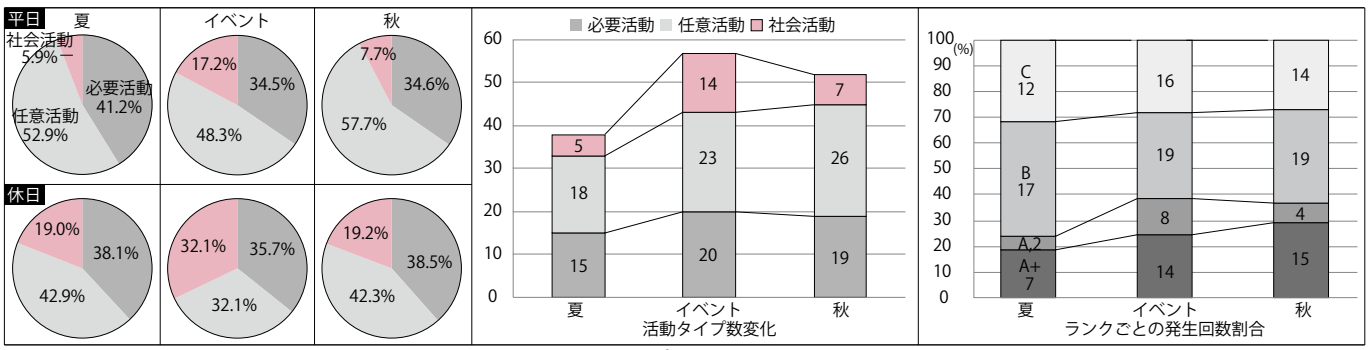


図５　活動タイプとランク毎の発生率

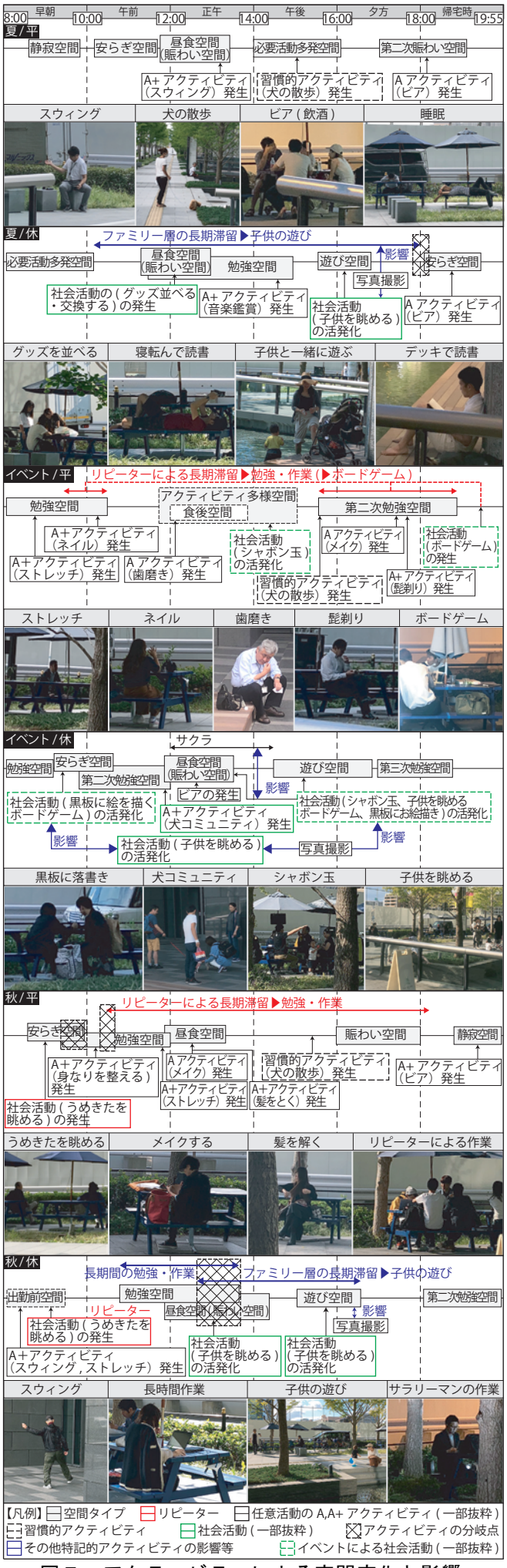


図７　アクティビティによる空間変化と影響

５−３　季節変化とイベント効果

季節変化及びイベント変化をこれまでの分析も踏まえて考察する。春、夏、秋は平日と休日で、利用者数の変化はあるもの、男女の割合に変化がなかった。(図 8)前述の通り、夏は猛暑による影響で利用者が減少したと考えられるが、9 歳以下の子供の割合が高く、図 9 より座具利用が低下し、平日では立つ行為が増加していることに加え、図 7 より休日は長期的な子供の遊びや賑わい空間が形成されていることから、水辺周辺での活発な遊びが明らかである。イベント時は図 8 より女性の割合が増加していること、表 2、図 5、図 7 より社会活動の活発化による空間の質的向上に資する結果が得られた。

通年を通して見ると、平日は男性の割合が高く、休日になると女性の割合が高くなる傾向が見られた。また、男性 40 代、50 代の割合が平日に増加し、一定の座具利用もあることから GFO 内従業員の座具利用が考えられる。(図 8、図 9)通年変化としては、リピーターの存在や平日の午後には犬の散歩などのアクティビティの定着も確認された。(図 7)空間変化を通年で見ると、早朝から午前の時間帯は「勉強・

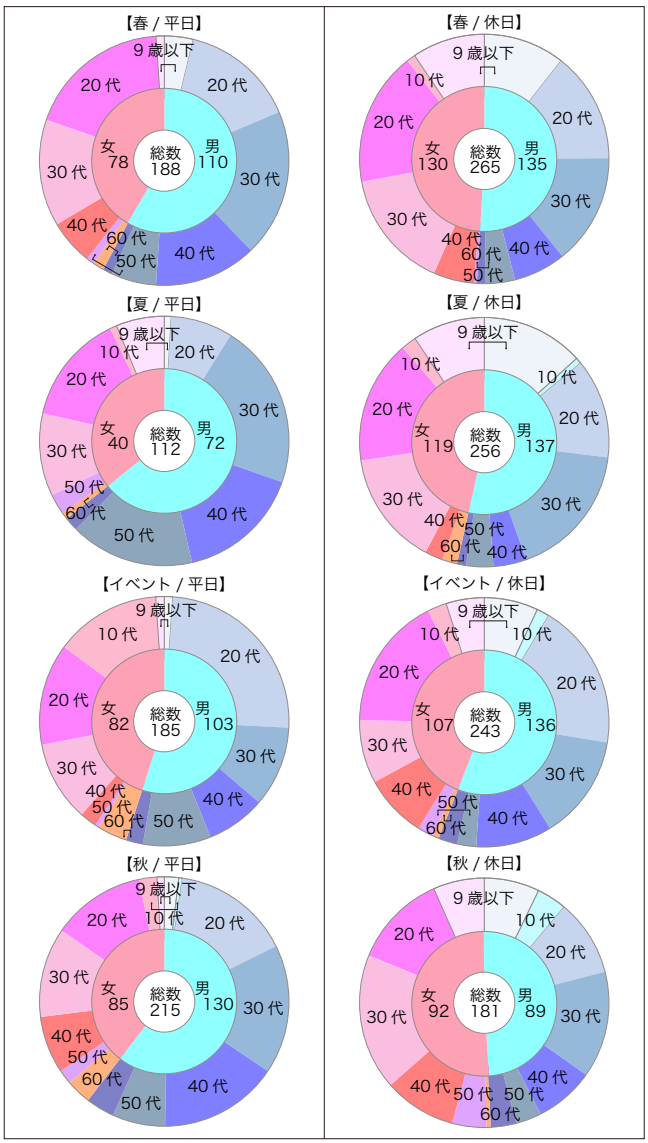


図８　性別/年代変化

安らぎ・静静空間」としての空間が定着化してきていることが分かった。昼は昼食空間が広がると共に、「賑わい空間」となってきている。午後になると平日の多くは「勉強・静寂空間」として変化するが、休日では「勉強・静寂空間」の前に子供達の「遊び空間」が形成されることがわかった。つまり、季節や平日/休日によって時間帯ごとの空間の使われ方に違いが生まれている。これらの結果より、使われ方に沿った空間活用を促進することでさらなる質の向上に繋がると考えられる。

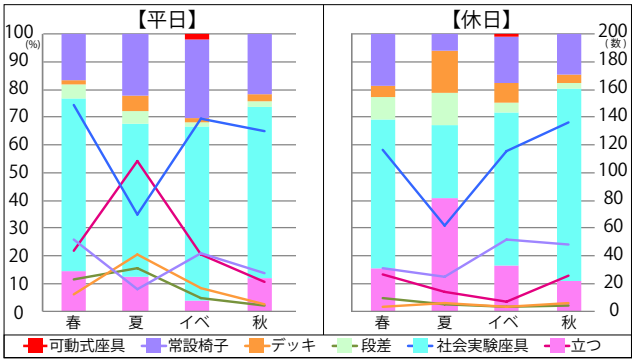


図９　座具利用割合/推移

６．まとめ

本研究では一連の分析から５つの考察が得られた。

（１）座具設置による賑わいの効果

座具設置により座具利用者のみでは無くエリア全体に利用者が増加したことで、賑わいに資する効果が得られた。また、GFO 内の休憩スペースの代用的空間としての昼食や休憩時利用の定着効果が確認できたとともに、利用者数の増加や滞留時間の長期化から社会実験としての効果が確認できた。

（２）季節的な変化

季節による影響も大きく関係することがわかり、夏は座具数の減少や暑さから利用者数や滞留時間が急激に下がっていることが分かった。このことから、夏の利用にはパラソル傘を全席設置する（通常は真ん中のみの傘を取り外している為）等の配慮が必要だと考えられる。また、夏の夜は他の季節ではほとんど見られないビア（飲酒）の利用や昼間での子供達の水辺利用が拡大する傾向にあることから、それらの対応や活用策が必要だと考えられる。

（３）平日と休日での相違

季節に関係なく平日は男性１人や単身利用の割合が多いが、休日は団体利用の割合が増加することから、平日と休日によって空間の使われ方に違いがあることがわかった。つまり、平日は GFO 内従業員を中心とした正午が最も利用者・アクティビティが多く、休日は母と子、ファミリー層を中心とした午後に利用者・アクティビティが多いことが分かった。

（４）リピーターの出現

座具を通年設置してきて、リピーターの利用が確認された。長時間滞在、または毎日利用するケースも確認された。このような利用者に対してどのようにしていくか検討する余地があると考えられる。

（５）アクティビティの影響・定着化

通年的な座具の設置やイベント要素の挿入により、ある特定の時間帯に発生するアクティビティやアクティビティによる影響が確認された。これにより、普段は早朝時に勉強する空間、昼間は飲食利用が多く、夕方は再び静かな空間へと変貌するが確認されたが、イベント時はシャボン玉を利用する人などによる影響で異なる空間を生み出し、人と人を繋げるきっかけを示唆する結果が生まれた。このことから、対象空間に対して今後も積極的なコトやモノの挿入により多様な人々の出会いの場を生み出すきっかけづくりができる望ましいと考えられる。

【注釈】

注１）ここでは、交通量調査、利用者数調査、アクティビティ調査のことを指す。

注２）道路上に一定の施設を設置し、継続して道路を使用することを道路占用と言う。

注３）飲食及び休憩行為等が可能な環境を生み出す座具のこと。

注４）道具など客観性・再現性のあるものや、体験として時間的な変化を与えることとする。

注５）ヤン・ゲールは都市空間における人間の様々な活動は「必要活動」「任意活動」「社会活動」に分類されるとした。

【参考文献】

1）国土交通省「社会実験の推進～道路施策の新しい進め方～，過年度の実施状況」
2）井澤 知旦，浦山 益郎，清水 奈緒，「道路空間(歩道)の地域共同管理の可能性に関する研究 ： 公共空間の公共一元管理から地域共同管理・運用への移行に関する研究」、日本建築学会計画系論文集、Vol. 69（2004），No.576
3）河本　雄介，中島　直人，「公開空地における占用行為に関する自治体独自の運用基準とその設定プロセス」、日本建築学会報告集、vo22（2016）,No.52,1127-1130
4）泉山 塁威，秋山 弘樹，小林 正美，「都心部における「民有地の公共空間」の活用マネジメントに関する研究―「東京のしゃれた街並みづくり推進条例」・まちづくり団体登録制度の調査・分析を通して―」，日本建築学会計画系論文集，Vol.80（2015）No.710，915-922
5）有馬 隆文，大木 健人，出口 敦，坂井 猛，「商業地街路における行動誘発要素と歩行者のアクティビティに関する基礎的研究-五感を刺激する商業地デザインと来訪者のアクティビティ-」日本建築学会計画系論文集，Vol.73（2008）No.623，177-182
6）泉山 塁威，中野 卓，根本 春奈，「人間中心視点による公共空間のアクティビティ評価手法に関する研究」、日本建築学会計画系論文集,Vol.81（2016）No.730，915-922
7）奥平 純子，郭 東潤，馮 瑶，斎藤 伊久太郎，北原 理雄，「仮設環境による公共空間のアクティビティ生成に関する研究」、日本建築学会計画系論文集,Vol.73（2008），No.623，161-167
8)J.ゲール著，北原理雄訳（1990)『屋外空間の生活とデザイン』鹿島出版会
9）J・ゲール著（2011)『建物のあいだのアクティビティ』
10）J.ゲール著，北原理雄訳（2014)『人間の街－公共空間のデザイン－』鹿島出版会
11）プロジェクト・フォー・パブリックスペース（2005)『オープンスペースを魅力的にする』学芸出版社
12)B・ルドフスキー,平良敬一・岡野一宇訳（1973)『人間のための街路』
13)ヘルマン・ヘルツベルハー,森島清太訳（1995)『都市と建築のパブリックスペースーヘルツベルハーの建築講義録－』